しも同じではな

のです。

また、観賞用イネは昔の品種の中から ^見た目の美しさ、 で選んだイネを使っ

パサパサとした食感です

の穂。

中のお米は白い色をしています。

たものなので、

お米の味自体はさほどではなく、

【観賞用イネ】 茎の色は必ず 赤や紫に染まった「祝い茜」

aff laboratory 見て楽しむ。 長らく日本

イネで地域を元気にする

をご存じです 育てやすい観賞用イネとして開発され存じですか?
それは、美しい色に染 人の食生活を支えてきた稲作 色に染まった稲 その た「祝い茜」「祝い紫」 イネに 穂や葉を観賞して楽しむ、に「食べる」以外の用途が 以外の用途があること をご紹介 します。 田舎館村役場 ٢

うも

文/酒井麻理子(フリー 写真提供/農研機構東北農業研究センター、

農

新しいイネの活用方法食べるだけではない

が少ないことから食用にはあまり向か 色づくのは、 ず、日本では多くは生産されてきませ はありません。 たイネ自体は、 ためですが、 アントシアニン系の色素を持っている ることが特徴の観賞用イネです。 の色がそれぞれ鮮やかな赤と紫に染ま がけた「祝い茜」と「祝い紫」 構)東北農業研究センタ 研機構 業・食品産業技術総合研究機 実はこれらの色素を持つ イネが赤、 ただ、味の問題や収量 それほど珍しいもので (国立研究開発法人農 青、 ーが開発を手 紫を示す は、 穂が 穂

ため、 性質上、 対馬在来を交配し、「祝い紫」は、 さらに、「祝い茜」は、極早生長芒と としての利用が難しくなります。 のが「祝い茜」と「祝い紫」です。 しっかり立つように改良を加えました. 観賞用イネは「見て楽しむ」 倒れにくく強い茎を持ち、葉も 12年の歳月をかけて開発された

があり、

また、

東北など寒い地域では

育

のイネと比べて

りにくいという難点

栽培されてきましたが、これらは通常

に観賞用の品種が作られ、

九州などで

在来品種として残っていたイネを元

てやすく、東北でも栽培できる品種と 栽培できないものでした。そこで、

から多くの参加者を集めています。 田植え体験ツア ネを使って精巧な絵柄を作り上げてい 青森県田舎館村では、7 田んぼアー 田んぼア を実施し、 トのイベン トの村として有名な 色10品種のイ 毎年全国 トとして

お土産や花材として販売美しい色を生かして

で東北での栽培を可能にしたので

観光資源を生み出す水田を有効活用して

フラワ

ーとして、

フラワ は、

「祝い茜」「祝い紫」

切り花やドラ

祝

との意味を込めて命名され

い事で使ってもらえるよう

つながって ることは、観光資源を生み出すことに を使って観賞用イネを栽培して販売す 効活用です。使用していなかった水田 観 ず挙げられるのが、 賞用イネのメリッ います。 水田の有 としてま

ています。

また、

イネの美しさを風景と

して楽

麗稲)」と命名。毎年15万本が出荷され などの観賞用イネを「秋田きれいね(綺 普及協会では、

「祝い茜」や「祝い紫」

大仙市の NPO 法人フラワ

ーデザイ

ントなどに利用されています。

秋田県

をキャンバスに見立てて、

色の異なる

しむプロジェクトもあります。

田んぼ

田んぼアー

トのプロジェク

イネを使って絵を描く「田んぼアー

地域活性化の助けとなる観賞用イネ 常に大きな可能性を秘めているのです ながるでしょう。 げられれば、 光需要を生み出しています。 には多くの人が集まり、田舎館村に観 メディアなどで田んぼア このように、 本1本は小さな穂でも、 地域の知名度向上にもつ 観光資源を生み出し、 そこには非 トが取り さらに、

1.2. 鮮やかな赤い色が人気

の「祝い茜」。色がつくのは 穂の部分のみで、葉や茎の部

分は通常のイネと同様に緑

色をしている 3.4. 「祝い

紫」は濃い紫色の穂が特徴。

この他に「奥羽観(おうう

かん) 383 号」という葉に白

の縦縞が入った観賞用イネも

毎年、2つの水田にさまざまな絵柄が登場する田舎館村の田んぼアート。どち 田舎館村では毎年、役場東側にある15,000平方メートルの水田で「田植 らも近くの展望台から観覧でき、期間中は2つの田んばを結ぶシャトルワゴンも え体験ツアー」を実施して、田んばアートの元となるイネを植えている。



運行される。穂が出る前の、茎や葉が色づく7月から8月にかけて見頃となる 田植え参加者の中には「田んぼに入るのが初めて」という人も多い



と対馬在来を交配すること▶

2001年までは、地元のシンボル的存在である岩木山と文字が入っただけのシン プルなデザインだった。2002年に開始10周年を記念して、大規模な田植えを実 施したのが、現在の田んぼアートの始まり

栽培過程で茎が倒れると商品

その

という

上から「祝い紫」、「祝い茜」、通常のイネ。比べてみると色 の違いが良く分かる。ドライフラワーとして出荷され、フラ ワーアレンジメントなどに活用される。また、鮮やかな色を 生かした正月のしめ飾りも作られ、好評を得ている

- 19 〜 /2015√ ○┼、「 /-7 月号

色がつく仕組みは複雑で、お米、穂、葉